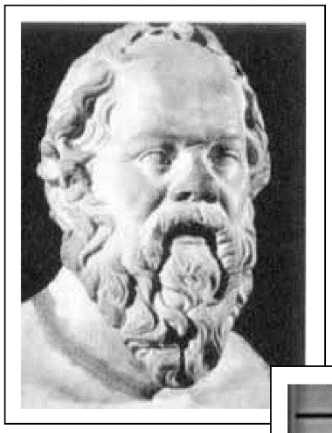
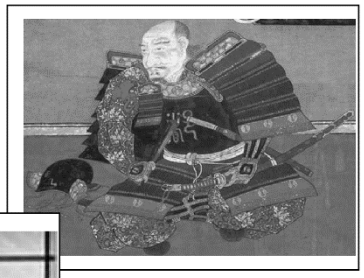
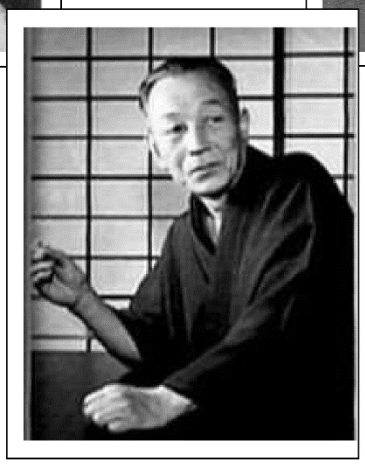
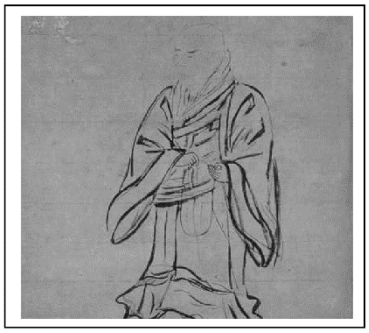
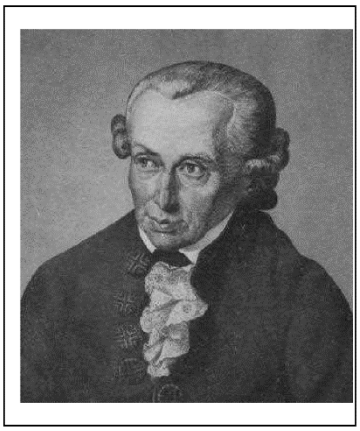






倫理学研究室紹介





【表紙の説明】

中央＝和辻哲郎（1889～1960）：近代日本の倫理学者。兵庫県仁豊野（現在の姫路市）に生まれ、第一高等学校、東京帝国大学に学ぶ。東洋、法政、京都帝国大学などでの勤務を経て、1933 年東京帝国大学倫理学講座教授に就任。囲碁、独自の倫理学大系を構築するとともに、現在の東大倫理学研究室の礎を築いた。主著『倫理学』は、近代日本におけるもっとも独創的かつ体系的な哲学書である。和辻の旺盛な知的関心が、今日の倫理学の研究分野のひろがりを可能にしている。

左上＝ソクラテス（BC469?～399）：古代ギリシャの哲学者。刑死するまで対話をつうじて、徳や知とはなにかを探究し続けた。今日まで続く倫理学的思考の歴史の原点にあるのは、弟子のプラトンが描いた「美しく若くなったソクラテス」（プラトン「第二書簡」314C）のすがたである。

右上＝鍋島直茂（1538～1618）：肥前佐賀藩の藩祖。三島由紀夫も愛した武士道の古典・山本常朝『葉隠』は、直茂以来の佐賀藩の精神風土のなかから生まれた。

左下＝親鸞（1173～1263）：浄土真宗の開祖。「他力本願」「悪人正機」などに代表される、親鸞の特異な信の形は、現在の倫理学思考にも根本的な問題を突きつけている。

右下＝カント（1724～1804）：近代ドイツの哲学者。西洋哲学の伝統のラディカルな変革者＝イマニュエル・カントの思考を支えていたのは、人間存在の倫理への、彼自身の独特な視線であった。

倫理学

◇教員◇

教　授：頼住 光子

准教授：古田 徹也

助　教：長野 邦彦

◇学生◇

学部：12 名、修士課程：4 名、博士課程：4 名

（※以下、東京大学文学部発行「PROSPECTUS 2023」より一部改訂のうえ抜粋）

「倫理学」という学問に、人が抱くイメージや期待にはおそらくさまざまなものがあるだろう。日常の行為の善悪について研究するということを思い浮かべる人もあるであろうし、また、ソクラテスの生に重なるような「よき生」の追求を思い描く人もあるだろう。自らの人生についての問いを直接重ねようとする人もあるだろうし、また、今日的な社会問題への積極的な発言を期待する人もいよう。倫理学専修課程に進学してくる学生諸君の思いも、そのようにきわめて多様なものであろう。

しかし、それが文学部のなかで、しかも思想系の学問分野の中での倫理学研究となると、そのありかたも限定されてくる。文学部の学問が原典テクストの精密な読解を身上とするように、倫理学専修課程の学問も、倫理学についての原典テクスト、就中古典のテクストの読解をその基本とすることになる。その点では思想史研究が中心となるのであり、現実的課題との関わりは間接的なものにとどまるということになろう。そのことはしかし、倫理という言葉に対する各人各様の思いを否定するものでは決してない。むしろ古典の読解にこそ、それぞれの思いが最も豊かな奥行きをもって現実化する場面があるというのが、われわれの確信である。

したがって、倫理学専修課程は、独断と空理空論を控えるという最低限の謙虚さを要求される以外は、きわめて自由な雰囲気に満ちている。かつてこの研究室の主任教員であった和辻哲郎は、日本近代において特筆すべき倫理学の体系を築き上げたが、それは、西洋思想と東洋思想の融合および規範学としての倫理学と事実の学としての諸学の融合を目指したものである。さらに、和辻は、倫理学以外に広く人文科学一般の分野でめざましい成果を上げたことで知られているが、この多様な学問領野に開かれているという性格は、今日においてなお生きていると言えるのである。学生の研究対象の選択も各人の大幅な自由に任されており、実際、これまでの卒業生の研究テーマも、洋の東西を問わず、また古代から現代に至るまで、まことに多彩である。

倫理学専修課程の講義・演習の対象領域は、西洋の倫理思想と日本のそれとに二大別される。倫理学がいち早く自覚的な形態をとった西洋の思想伝統を学ぶことは、日本倫理思想史を専攻しようとする学生にとっても欠かすことはできない。一方、西洋の倫理学に関心を持つ者にとっても、自らが背負う伝統との対話は必要である。相異なる領域への幅広い目配りが求められるのが当専修課程の特色である。

以下、教員の紹介を兼ねて、令和元年度に倫理学専修課程が実施した全授業を列挙する。

熊野純彦教授（令和四年度に退職）は、ドイツ観念論から現代のドイツ・フランス思想に至るまでの思想史的研究をふまえながら、他者、身体、言語といった問題系、また時間、所有、自己といった主題系を、倫理学的に、すなわち「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することを試みてい

る。「倫理学概論（Ⅰ）」（「倫理学ならびに実践哲学の基本概念」）では、“倫理学”および“実践哲学”をめぐる基本概念（“テオーリア”“プラクシス”等）を、古代ギリシャの倫理思想にまでさかのぼって考察した。また「倫理学演習」では、カント『人倫の形而上学』、ベルクソン『意識に直接あたえられたものをめぐる試論』をそれぞれ取り上げ、精読し、精力的な議論を喚起した。

頼住光子教授は、日本文化の根幹を形作っている仏教思想について、道元や親鸞の著作を中心としつつも、日本仏教の全般、さらには大乗仏教の経典論釈全般にわたって幅広く研究している。「倫理学概論（Ⅱ）」では、日本における倫理思想史の展開について、仏教、儒教、神道など主要な教説や文学等を手掛かりとしながら概説した。「倫理学演習」（「日本倫理思想史演習」）では、日本倫理思想史を考えるための基本文献として、主として道元『正法眼蔵』のテクストを講読した。それを通じて受講者が、日本倫理思想史の基本的な発想方法について習熟し、日本倫理思想史研究の方法論を身につけることを目指した。「東洋倫理思想史概説」では、日本の仏教思想の展開についてインド仏教以来の諸仏典の読解をてがかりとしつつ跡づけた。また日本仏教の特色を比較思想的観点から検討した。

古田徹也准教授は、「言語」「心」「行為」の各概念を手掛かりにして、主に英語圏とドイツ語圏の現代哲学・倫理学を研究している。主に関心を向けているのはルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学である。「西洋倫理思想史概説」では、「運」というキーワードを軸にして、古代から現代までの西洋の倫理思想史を跡づけた。また、「倫理学演習」では、ウィトゲンシュタインの主著『哲学探究』を精読するほか、現代の英語圏の倫理学における基本文献を批判的に検討し、西洋倫理思想に本格的に足を踏み入れるための知識と思考能力を受講生が養うことを企図した。さらに「倫理学特殊講義」（※長野邦彦助教との連名講義）では、倫理思想史全体の鍵となるいくつかの概念および思想家について概観し、倫理学という学問に入門する手引きとした。

その他、令和四年度の非常勤講師による講義の題目は、以下の通りである（肩書きは令和四年度当時のもの）。

吉田真樹（静岡県立大学）	東洋倫理思想史概説「倫理学・日本倫理思想史の基礎」
石井清純（駒澤大学）	倫理学特殊講義「日本の禅思想」
三重野清顕（東洋大学）	倫理学特殊講義「西洋近代哲学の諸問題」
板東洋介（筑波大学）	共通講義「日本の思想と宗教」

このように、倫理学専修課程は、一方では古典的学問研究を尊重しつつも、他方では、哲学、社会科学、宗教学、日本思想等の諸学問に開かれた幅広い内容を持つ学問を目指しているという点で、思想系学科のなかでも特徴を示していると言える。そのことは、当専修課程を卒業し、その後研究者の道に入った先輩の学問にも明らかである。そのような条件をどう生かすかは、学生諸君の自発的研究に期待されている。

学部開講科目一覧（2023 年度）

授　業　科　目	講　義　題　目	担当教員情報		開講情報		
		氏　　名	所　　属	開　講 ターム	曜 日	時 限
倫理学概論Ⅰ	倫理学の基本概念	中野裕考	お茶の水女子大学	S1＋S2	木	2
倫理学概論Ⅱ	日本倫理思想史概説	頼住光子	本学	A1＋A2	木	2
西洋倫理思想史概説Ⅰ・Ⅱ	言葉をめぐる倫理思想史	古田徹也	本学	S1＋S2 A1＋A2	月	4
東洋倫理思想史概説Ⅰ	倫理学・日本倫理思想史の基礎	頼住光子	本学	S1＋S2	金	3
東洋倫理思想史概説Ⅱ	倫理学・日本倫理思想史の基礎	吉田真樹	静岡県立大学	S1＋S2 A1＋A2	金	3
倫理学特殊講義Ⅰ	日本倫理思想史の基本問題	古田徹也 長野邦彦	本学	S1＋S2	火	4
倫理学特殊講義Ⅱ	日本の禅思想	石井清純	駒澤大学	S1＋S2	水	5
倫理学特殊講義Ⅲ	西洋近代哲学の諸問題	三重野清顕	東洋大学	A1＋A2	金	2
倫理学演習Ⅲ・Ⅳ	日本倫理思想史の諸問題	頼住光子	本学	S1＋S2 A1＋A2	月	5
倫理学演習Ⅶ・Ⅷ	ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む	古田徹也	本学	S1＋S2 A1＋A2	水	2
倫理学演習Ⅸ・Ⅹ	英語圏の現代倫理学の重要文献を読む	古田徹也	本学	S1＋S2 A1＋A2	水	4

教員紹介（2023 年 4 月現在）

（1）頼住光子

1961 年神奈川県生まれ。日本思想担当。専門は道元を始めとする日本仏教思想。斯界の第一人者として、いわゆる宗門とは異なった切り口で、和辻哲郎によって切り拓かれた倫理学・日本倫理思想史の方法に基づいて、テクストを厳密に読み解き、その思想的／現代的な意義を提示している。仏教および道元などに関する入門書を始め、著書多数。

〈著書〉

- 『道元　自己・時間・世界はどのように成立するのか』（NHK 出版、2005）
- 『日本の仏教思想　原文で読む仏教入門』（北樹出版、2010）
- 『道元の思想　大乗仏教の真髄を読み解く』（NHK 出版、2011）
- 『正法眼蔵入門』（角川書店、2014）
- 『さとりと日本人』（ぷねうま舎、2017）

〈共著〉

- 『人間の社会と宗教』（保坂俊司他(著)、北樹出版、1998）
- 『人間の文化と宗教』（保坂俊司他(著)、北樹出版、2000）
- 『思想の身体　徳の巻』（黒住真他(著)、春秋社、2007）
- 『「いのち」の流れ』（峰島旭雄先生傘寿記念論文集編集委員会(編)、北樹出版、2009）
- 『宗教を考える教育』（頼住光子・宗教教育研究会(編)、教文館、2010）
- 『道の手帖　井筒俊彦　言語の根源と哲学の発生』（安藤礼二他(編)、河出書房新社、2014）
- 『東アジアの共通善　―和・通・仁の現代的再創造をめざして―』（荒木勝（監修）・邊英浩（編）、岡山大学出版会、2017）
- 『日本仏教を捉え直す』（末木文美士他(著)、放送大学教育振興会、2018）

〈訳書〉

- オームス『徳川イデオロギー』（黒住真他（共訳）、ぺりかん社、1990）

（2）古田徹也

1979 年熊本県生まれ。西洋思想担当。英語圏とドイツ語圏における近現代の哲学・倫理学全般を専門とし、特にルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学を土台にしながらも、専門領域に囚われず、言語・行為・心・運などのテーマを広い視点で考察を重ね定評を得ている、我が国における新進気鋭の哲学者の一人。2019 年度サントリー学芸賞受賞。

〈著書〉

- 『それは私がしたことなのか　行為の哲学入門』（新曜社、2013）
- 『言葉の魂の哲学』（講談社、2018）
- 『ウィトゲンシュタイン　論理哲学論考』（KADOKAWA、2019）
- 『不道徳的倫理学講義　人生にとって運とは何か』（筑摩書房、2019）
- 『はじめてのウィトゲンシュタイン』（NHK 出版、2020）
- 『いつもの言葉を哲学する』（朝日新聞出版、2021）
- 『このゲームにはゴールがない　ひとの心の哲学』（筑摩書房、2022）

〈共著〉

- 『ウィトゲンシュタイン　KAWADE 道の手帖』（河出書房新社、2011）
- 『科学技術の倫理学』（勢力尚雅(編著)、梓出版社、2011）
- 『感性学　触れ合う心・感じる身体』（栗原隆（編）、東北大学出版会、2014）
- 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅・古田徹也(編著)、梓出版社、2015）
- 『経験論から言語哲学へ』（勢力尚雅・古田徹也(著)、放送大学教育振興会、2016）
- 『これからのヴィトゲンシュタイン』（荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也(著)、リベルタス出版、2016）
- 『高等学校 新倫理 新訂版』（菅野覚明・熊野純彦・ 山田忠彰(編)、清水書院、2017）

〈訳書〉

- ウィギンズ『ニーズ・価値・真理　ウィギンズ倫理学論文集』（共訳、勁草書房、2014）
- ダイアモンド『ウィトゲンシュタインの講義　数学の基礎篇　ケンブリッジ 1939 年』（共訳、講談社、2015）
- ウィトゲンシュタイン『ラスト・ライティングス』（講談社、2016）
- 『現代倫理学基本論文集 II 規範倫理学篇１』（大庭健(編)、古田徹也(監訳)、勁草書房、2021 年）
- 『現代倫理学基本論文集 III 規範倫理学篇２』（大庭健(編)、古田徹也(監訳)、勁草書房、2021 年）

東京大学文学部倫理学研究室　卒業論文題目リスト

（※過去の卒業論文は倫理学研究室にて閲覧することができます）

〈平成２７年度〉

①　「ヤスパース哲学における実存と超越者」
②　「長阿含経の基本構造の解明」
③　「『兵法家伝書』における「平常心」の内容とその普遍性」
④　「鴨長明『発心集』における和歌について」
⑤　「心戒と長明に注目して『発心集』を読み解く　第七巻十二話を手掛かりに」
⑥　「『教行信証』に見る親鸞の易行思想とその背景」
⑦　「親鸞における「信」の問題について」
⑧　「日蓮『開目抄』における正しさへの態度」
⑨　「荷田在満『国歌八論』について」
⑩　「『心中天の網島』における治兵衛にとってのおさんと小春について」
⑪　「柳田國男の風景・旅の思想」

〈平成２８年度〉

①　「『直毘霊』における神の畏れについて」
②　「国家と戦争　ヘーゲルの政治思想における戦争の倫理的意義」
③　「ニーチェ『道徳の系譜学』における暴力性の解釈」
④　「『教行信証』における悪人往生について　阿闍世の五逆罪に対する『大無量寿経』の救済除外規定と親鸞の悪人往生思想」
⑤　「『全体性と無限』における「ことば」」
⑥　「「葉隠」における「純一無雑」」
⑦　「空海における悟りの理解について」
⑧　「個性と運命　ヘーゲル『精神現象学』の「作品 Werk」をめぐる思考」

〈平成２９年度〉

①　「レヴィナスのブランショ解釈」
②　「日本の風土と精神性」
③　「『エミール』倫理の所在」
④　「カント『実践理性批判』範型論の読解　自然法則が範型として機能することについて」
⑤　「西田幾多郎『現実の世界の論理的構造』の生死観」

〈平成３０年度〉

①　「太宰治『お伽草紙』論」
②　「「桜川」との対比に見る謡曲「隅田川」の主題」
③　「『歎異抄』における悪人正機の倫理的考察」
④　「『発心集』と発心・遁世のあり方」
⑤　「聖徳太子信仰の描写法とあり方・変化について」
⑥　「『古事記』におけるホムチワケ考」
⑦　「本居宣長と日本人の死生観」
⑧　「日本の風土と精神性」

〈平成 31 年度 / 令和元年度〉

①　「カントの「観念論論駁」について」

② 「儒学の観点から見た荻生徂徠の経済政策」
③ 「『発心集』に見る数寄・風流の仏教的な意味」
④ 「「梅岩思想の核心となる都鄙問答」～梅岩思想の与えた思想史的意義の再考～」
⑤ 「『悪魔と神』における政治の倫理―個人と集団の弁証法を超えて
⑥ 「欲望と生命――『精神現象学』「自己意識」章冒頭部分における実践哲学的問題」
⑦ 「上田秋成の命禄論」
⑧ 「『選択本願念仏集』の思想について」
⑨ 「宮本武蔵著『五輪書』における武士道に見る近代以降の武道精神の源流」
⑩ 「『五輪書』の思想 宮本武蔵の武士観」
⑪ 「井原西鶴『武家義理物語』における武士の倫理」

〈令和２年度〉
① 「シノペのディオゲネスの倫理思想「生への志向」の哲学」
② 「正義の倫理とケアの倫理の関係」
③ 「義務の導出におけるカントの定言命法の有効性――クリスティン・コースガードの論考をめぐって」
④ 「規範倫理学における徳倫理の検討」
⑤ 「『葉隠』における「和」の思想」
⑥ 「レヴィナス『全体性と無限』における欲望の自我論的意義」

〈令和３年度〉
① 「アリストテレス『ニコマコス倫理学』における対人関係論と倫理学の問題」
② 「デイヴィッド・ヒュームの自由論」
③ 「1940 年代のレヴィナスにおけるエロス・繁殖性概念の射程」
④ 「R・M・ヘアの合理的な道徳的推論への批判的検討」
⑤ 「ドゥオーキンにおける「善き生」の追求 「平等」と「共同体」をめぐって」

〈令和４年度〉
① 「自己了解と倫理的態度 『存在と時間』における良心論の読解」
② 「ジャック・ラカン「文字の審級」論文におけるシニフィアン」
③ 「時間の論理学による哲学的議論の明晰化」
④ 「『葉隠』における近世武士の死生観」

東京大学文学部倫理学研究室　修士・博士論文題目リスト

（※過去の修士・博士論文は倫理学研究室にて閲覧することができます）

〈平成２８年度〉
修士論文
①「アリストテレス倫理学における友人と幸福について」
②「親鸞の三願転入観　第十九願理解に着目して」
③「カントの実践的認識について　道徳における叡智的なものの理解」
博士論文
①「アダム・スミスの道徳哲学と人間本性の合目的性」
②「ヘーゲル「主観的精神論」研究　精神における主体の生成と条件」
③「エレミヤ書における罪責・復讐・赦免　エレミヤ書における応報倫理の展開」

〈平成２９年度〉
修士論文
①「リクール倫理思想における再物語の問題　再形象化の概念を中心に」
②「『教行信証』における『十住毘婆沙論』引文の位置　般舟三昧から称名念仏への転形」

〈平成３０年度〉
博士論文
①「複数性の哲学　アーレント哲学の体系的解釈」

〈平成 31 年度 / 令和元年度〉
修士論文
①　「「作品」の宇宙　ヘーゲル『精神現象学』におけるアリストテレス受容の一断面」
②　「伊藤仁斎の学問論における「自合於天道」」
博士論文
①　「近松門左衛門の浄瑠璃作品における秩序と情念　敵役のゆくえ」
②　「アリストテレスの倫理思想における快楽と苦痛　「二つの快楽論」から〈共生の完全化〉へ」
③　「ハイデガーの実存哲学　『存在と時間』の統一的解釈の試み」

〈令和２年度〉
博士論文
①「師弟および修行者間における修証の相互相依存的成立構造　『正法眼蔵』「古鏡」巻注解」

〈令和３年度〉
修士論文
①「『精神現象学』意識章における実在・本質」
②「モーリス・メルロ＝ポンティの前期真理論　「真理の現実化」をめぐって」

〈令和４年度〉
修士論文
①「キュレネ派はなぜ快楽主義を採ったのか　快楽のアピールをめぐって」
②「『全体性と無限』における責任としての主体　多元論と内部性の共存」
博士論文
①「ベルクソンにおける自我　『直接与件』と『物質と記憶』を中心に」

（参考資料 1）

1・2 年生のみなさんへ～在学生からのメッセージ～

「倫理」という言葉を聞くと、皆様はどういったことを思い浮かべるでしょうか。

日常的に使用される場合には道徳とほぼ同義であるように思われますが、和辻哲郎が『倫理学』において指摘したように、倫理とは、その本来の語義によれば「人と人の間柄」という人間のあり方を示すものです。そしてこの倫理学研究室は、そのような「人間」を、様々なテクストと格闘することをもって探究することを第一の流儀としています。そしてその和辻の業績が物語っているように、東洋・日本思想並びに西洋哲学を、古代から現代まで広く学べることは、他の研究室とは異なる特色・強みといえるでしょう。

本研究室では第一線でご活躍されている先生方や諸先輩方の下で存分に思考に没頭できる環境が用意されています。私自身日々そのような「間柄」に感謝しつつ、有意義な時間を過ごしています。新たな倫理学徒との出会いを楽しみにしております。

Ｓ・Ｙさん（2017 年度博士課程進学）

倫理学研究室では現在、現代の世界における倫理を語るうえで欠かすことのできない西洋のテクストを読む演習と、私たちが今学んでいる日本において顕現した倫理思想を映しだす、古典的な日本語・漢文のテクストを読む演習との二つが開講されており、講義でも西洋・東洋にまたがって多様なテーマについて学ぶことができます。また、ほかの専修課程や他学部の授業を取る余裕も確保されており、自分の関心に沿って古今東西・学問の分野を問わず、幅広い知見に出会う機会が作られています。こうした幅広い出会いを通じて自分の射程を広げつつ、演習では、原典のテクストを真摯に読み込むという、鍛錬が必要ではあるけれども自らの軸となる専門性を獲得するために欠かせない営みを積み重ねていくことによって、テクストの中に眠っている価値を掘り起こし、自分の言葉でそれを語る力を身につけることができるのだと思います。私は 4 年で大学を去る予定ですが、卒業論文では何とかこの営みを形にしたいと考えています。興味を持たれた皆様、ぜひ倫理学研究室へいらっしゃってください。

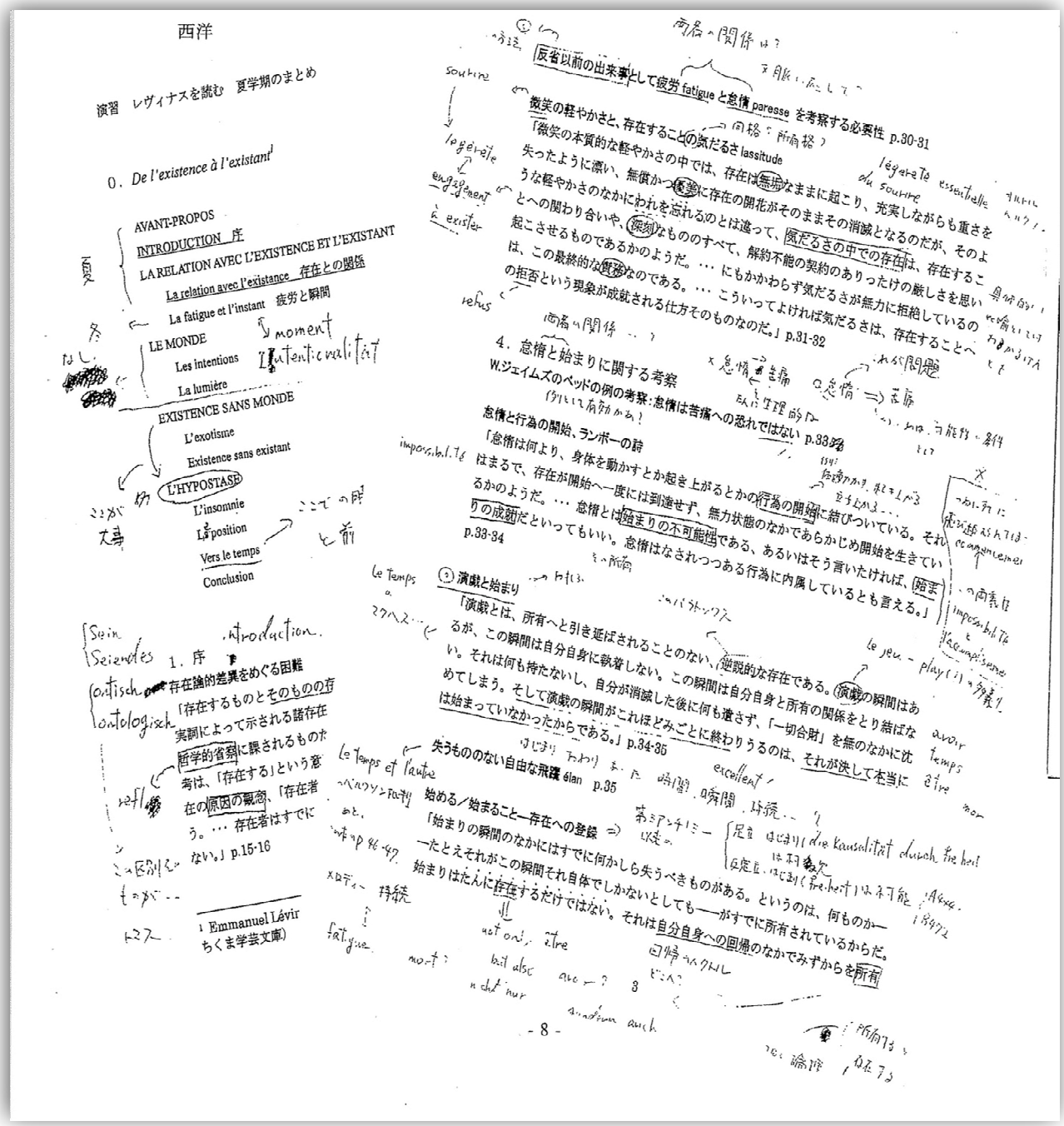
Ｋ・Ｗさん（2015 年度文学部進学）

（※上記メッセージは、前期課程（1・2 年生）向けに書かれたものです。）

（参考資料 2）

対話の痕跡―原典講読ゼミレジュメ公開―

（西洋思想）



西洋

演習　レヴィナスを読む　夏学期のまとめ

0．*De l'existence à l'existant*[1]

AVANT-PROPOS
INTRODUCTION　序
LA RELATION AVEC L'EXISTENCE ET L'EXISTANT
La relation avec l'existance　存在との関係
La fatigue et l'instant　疲労と瞬間
LE MONDE
Les intentions
La lumière
EXISTENCE SANS MONDE
L'exotisme
Existence sans existant
L'HYPOSTASE
L'insomnie
La position
Vers le temps
Conclusion

1．序
「存在するものとそのものの存
実詞によって示される諸存在
哲学的省察に課されるものの
考は、「存在する」という意
在の原因の氣高、「存在者
う。… 存在者はすでに
ない。」p.15-16

1 Emmanuel Lévir
ちくま学芸文庫）

反省以前の出来事として疲労 fatigue と怠惰 paresse を考察する必要性 p.30-31
「微笑の本質的な軽やかさの中では、存在は無垢なままに起こり、充実しながらも重さを失ったように濃い、無償かつ優美に存在の開花がそのままその消滅となるのだが、そのような軽やかさのなかにわれを忘れるのとは違って、気だるさの中での存在は、存在することへとの関わり合いや、瞬刻なもののすべて、解約不能の契約のありったけの厳しさを思い起こさせるものであるかのようだ。… にもかかわらず気だるさが無力に拒絶しているのは、この最終的な質疑なのである。… こういってよければ気だるさは、存在することへの拒否という現象が成就される仕方そのものなのだ。」p.31-32

4．怠惰と始まりに関する考察
W.ジェイムズのベッドの例の考察：怠惰は苦痛への恐れではない p.33-34
怠惰と行為の開始、ランボーの詩
「怠惰は何より、身体を動かすとか起き上がるとかの行為の開始に結びついている。それはまるで、存在が開始へ一度には到達せず、無力状態のなかであらかじめ開始を生きているかのようだ。… 怠惰とは始まりの不可能性である、あるいはそう言いたければ、始まりの成就だといってもいい。怠惰はなされつつある行為に内属しているとも言える。」p.33-34

③演戯と始まり
「演戯とは、所有へと引き延ばされることのない、逆説的な存在である。演戯の瞬間はあるが、この瞬間は自分自身に執着しない。この瞬間は自分自身と所有の関係をとり結ばない。それは何も持たないし、自分が消滅した後に何も遺さず、「一切合財」を無のなかに沈めてしまう。そして演戯の瞬間がこれほどみごとに終わりうるのは、それが決して本当には始まっていなかったからである。」p.34-35

始める／始まること―存在への登録 élan p.35
「始まりの瞬間のなかにはすでに何かしら失うべきものがある。というのは、何ものかーたとえそれがこの瞬間それ自体でしかないとしてもーがすでに所有されているからだ。始まりはたんに存在するだけではない。それは自分自身への回帰のなかでみずからを所有

- 8 -

（3）尊王攘夷論

・ 大隈の回顧：「人文の発達→自然統一」もありえたが、国難が契機となって封建制で分裂した状態が帝室を中心とした統一にむかった。その中心は勤皇党と攘夷党が結びついた尊王攘夷運動であった＞大綱的にはそのとおりだが、そうは言っても尊王攘夷論は多岐にわたるので、ここまで一括しては語れない。

・ よって、「幕末の複雑な政治的情勢のさなかにおいて、それがいかなる社会層のいかなる社会的立地において主張されているかといふことが具体的に分析されて始めて、尊皇攘夷思潮はその歴史的全貌を露呈する。」(p348L6-8)

・ 封建的攘夷論（諸侯らの主唱した攘夷論）：「国際関係の密接化に伴ふ支配的特権の動揺を恐れるといふ階級的利害が屢屢露骨に作用していた」(p348L10-11) ＞尊王敬幕または公武合体論

・ 「書生の尊王攘夷論」＞反幕または討幕論

・ 尊攘思想の面から見た幕末史は、前者の優越性が次第に後者に移行していく過程にほかならぬ

・後期水戸学：封建的攘夷論の例

会沢正志斎『新論』：攘夷論の聖典

尊攘論の「前期」的性格＝被支配層に対する根本的不信感、彼らが外国勢力と組んで封建的支配関係を揺るがすことに対する恐怖＜

家康の愚民化政策の称揚とその限界の認識

ひ」ることを目指す（農兵制）＞「民をし

（結局愚民政策）＞藤田東湖「姦民狡夷」（

水戸学を始め、前期の攘夷論と結びついた

的君臣関係＝尊王の実践）

水戸学の影響：広範に浸透し、一切の尊王

時務論と結びつけられて初めて一体として

内容は問われずに政治的パローレになった

の集中的表現

列国との条約締結→「打ち払い的」攘夷論

夷論 vs「激派」尊王攘夷論）→尊攘論にお

・吉田松陰：「激派」尊王攘夷論の例

ペリー来航（対外的重大危機）以後に形成

りも切実＞「天下は天朝の天下にして」（封

分的な閉鎖性の打破）

当初は尊王敬幕→ハリスとの間に通商仮条

主独立を担いうるものが見いだせない→草

（4）まとめ

・ 前期的国民主義思潮の内面的傾向

外国勢力に直面→国民的統一のための２つの国内対策（政治力の国家的凝集、それの国民的浸透）

	海防論	富国強兵論	尊王攘夷論

政治力の凝集：地方割拠の否定→絶対主義的体制→結集軸としての尊王論

国民的浸透：「言路を開く」→評価は難しい →担い手変化（封建支配層→草莽）

「公議輿論」思潮の台頭と歴史的動向

「前期的国民主義」は対外的危機への対応が問題となる時代に形成されたので、政治力の凝集が圧倒的に先行した＞尊王攘夷論においても草莽の浪人レベル＞政治力は庶民の間から成長しなかった（前期性）

・ その帰結として、「仲介勢力の排除が庶民層の能動的参与無しにまさに仲介勢力を構成する分子によって遂行されたといふ所に近代国民国家の形成のための維新諸変革を決定的に性格づける要因があ」り、国民の精神の独立は明治の思想の課題となった

（Ⅲ）検討

・ p353L10「パローレ」とは何か？parole(パロール)のことか？ならばなぜパロールと言えるのか？

・ p361L11 「封建機構の鉄壁」とは何か？

・ ３章全体の流れの特徴とここでの事態の一般化

・ 丸山真男の富国強兵論の叙述にはどのような特徴があるか？

・ 尊王攘夷論特に『新論』の捉え方にはどのような特徴があるのか？

・ 幕末、維新期に発動したのは何か。丸山はそれをなんだと考えているか？これは妥当か？

・ 佐久間象山の影が薄いのはなぜか？

・ イデオローグは何をあきらめて何を求めているのか？

お問い合わせ先

・住　所：〒113－0033 東京都文京区本郷 7－3－1 法文 2 号館 3 階 2314 号室
・電　話：03－5841－3760
・メール：l_eth@l.u-tokyo.ac.jp

研究室開室体制

・平日　11 時 00 分～13 時 00 分／14 時 00 分～16 時 00 分
・訪問のさいは事前のアポイントメントを推奨します。
・長期休暇期間の間は上記の限りではありません。
・開室体制は予告なく変更することがあります。